

紹介と書評「死は存在しないー最先端量子科学が示す新たな仮説」(田坂正志著 光文社新書)
田中正治

田坂広志 量子物理学 - Google 検索

本書は死について、死後の世界について語っているが宗教書ではない。

著者は死を見つめる3つの視点についてまず整理する。

第一は**宗教的視点**。「死後の世界」が存在することを明確に主張するが、なぜどのように存在するか「神秘のベール」に包んでしまっている。

第二は**科学的視点**。「死後の世界」は存在しないと明確に主張するが、無数の人々が体験してきた「不思議な出来事」や「神秘的体験」については「脳神経の誤作用」であるとし、なぜそうした「不思議な体験」が起こるのか科学的に説明しようとしなない。

第三は**医学の視点**である。「臨死体験」の存在や、「死後の世界」の存在についてはその可能性を認め、科学的客観性を持ってそれらの「不思議な体験」が存在することを報告するが、それらがなぜ起こるのかを科学的に説明できないと指摘する。

「不思議な体験」とは、例えば「視線感応」「以心伝心」「予感」「予知」「シンクロニシティ」などである。

著者はこれらの現象を科学的に説明できないか模索してきたが、20余年前に一つの「科学的仮説」にたどり着いた。それは科学の最先端、量子物理学の世界で論じられている「ゼロポイントフィールド仮説」と呼ばれる。この仮説が正しければ「神秘的な現象」や「神秘的な体験」も明らかにできると主張する。

「ゼロポイントフィールド仮説」とは何か？。

- 1) 量子空間から生まれた宇宙の真の姿は、「物質」ではなく「波動」である。
- 2) したがって宇宙で生じたすべての出来事は、我々の肉体や意識の活動を含めすべて「波動」に他ならない。
- 3) 現実世界で生じた波動の軌跡は、量子空間の「ゼロポイントフィールド」に「波動」の軌跡として、すべて「記録」されている。

SFチックでにわかには信じがたいが、著者は原子力工学の博士で量子物理学の研究者でもあり、量子物理学の最先端の動向に注目してきた人である。

プロフィール | 田坂広志公式サイト (hiroshitasaka.jp)

「宇宙には「量子真空」と呼ばれるものが存在し、その場が「ゼロポイントエネルギー」で満たされているということは、現在科学的事実として認められている」(p117)その科学的前提に立って論を進める。ゼロポイントエネルギー (hmn.wiki)

では、量子空間とは何か？

宇宙誕生の前に何があったか？量子真空があった。その量子真空のゆらぎが極微小の宇宙を生み出し、急激に膨張、その直後ビッグバン(大爆発)を起こし現在の宇宙が誕生した。これは量子真空のなかに壮大な宇宙を生み出せる莫大なエネルギーが潜在していたことを意味する。この量子真空は我々の周りに、宇宙のあらゆる場所に無限のエネルギーとして存在するとされる。

私ごとになるが、知人のSさんは人生に悩みぬいていたある時、突然天からエネルギーのようなものが降りてきて、それ以来いろんなものが「見える」(透視)ようになったそう。集中して目を閉じ

ると眉間のあたりに霧がかかりその霧が消えると見えてくるそうだ。その天からのエネルギーが量子真空のゼロポイントエネルギーなのだと考えると、説明が見つかるかもしれない。東洋でいう「氣」もこのゼロポイントエネルギーで説明が見つかるように思える。

次に著者は 彼独自の領域「ゼロポイントフィールド仮説」の説明に入る。「ゼロポイントフィールド仮説」とは、量子真空の中に「ゼロポイントフィールド」という場があり、その場に宇宙のあらゆる出来事の情報「波動情報」として「ホログラム原理」で「記録」されているという仮説だ。生命体も物質もこの世界のすべては、原子によって構成されており、さらに電子、陽子、中性子という素粒子で構成されていて、その素粒子の正体は「エネルギーの振動」であり「波動なのである」。「それゆえ、もし「量子真空」の中に存在する「ゼロポイントフィールド」が、この宇宙で起こった「出来事」、すなわち「波動エネルギー」を「波動情報」として記録しているのであれば、「ゼロポイントフィールド」が、この宇宙の「すべての出来事」を記録しているという仮説は、決してどう荒唐無稽な理論ではない」(p125)

この仮説が正しければ、Sさんが、「上のほうから突然エネルギーが降り注いできて、いろんなものが見えるようになった」、ということは「ゼロポイントフィールド」に記録された「出来事」と接続されたことで説明が見つかるようにおもわれる。

「ゼロポイントフィールド」に記録されていると述べているが、その記録は「波動情報」として、「ホログラム原理」で「記録されているという仮説である。では、ホログラム原理」とは何か？それは、波動の「干渉」を使って、波動情報を記録する原理で、位相を変えた「波動」同士が干渉するとき生まれる「干渉縞」を記録することによって、高密度の情報密度を可能にし、鮮明な立体映像を可能にする原理である。」(p131)

この「ホログラム原理」の特徴は記録した情報が記録した「すべての場所」に保存されているため、媒体の一部からも「全体構造」が取り出せる。従って、フィールドの「一部」につながるだけでフィールドに記録された「全体構造」に触れることができる。この「ホログラム原理」は、情報記録の原理として、この宇宙や世界の根底にある基本原理とされる。

では、なぜ人間の意識が「ゼロポイントフィールド」につながる事が可能なのか？そこに記録されている「宇宙のすべての出来事の情報」や「過去、現在、未来の出来事の情報」につながる事が可能なのか？その理由は、人間の脳や身体は、「ゼロポイントフィールド」と量子レベルでつながることが可能だからとされる。

「そのため、脳や身体のある特殊な状況においては、我々は「ゼロポイントフィールド」から情報を受け取ることができ、このフィールドに情報を送ることができるのであり、その特殊な状況において我々の脳や身体は、「宇宙のすべての出来事の情報」や「過去、現在、未来の情報」につながる事ができるのである。」(p153)この仮説は脳科学の最新理論「量子脳理論」によって裏付けられると著者は主張する。

この「量子脳理論」とは、スティーブン・ホーキングとともに「ブラックホールの特異点定理」を証明した理論物理学者ロジャー・ペンローズによって提唱されているもので、ペンローズは2020年にノーベル物理学賞を受賞した。彼は「量子脳理論」で人間の脳の中で起こっている情報プロセスは「量子プロセス」であるとの仮説を提唱している。

従って、著者は「もし、この量子脳理論」が正しく、そのコミュニケーションに量子プロセスを使って

いるのであれば、脳が「ゼロポイントフィールド」と量子レベルでつながって入りことは大いにありうることであり、科学的に見ればそれなりに合理性を持った仮説である。」(154)と量子脳理論に同意している。

従って、直感や以心伝心や予知、シンクロシティィーといった「意識の不思議な現象」は、人間の意識が「ゼロポイントフィールド」とつながることによって、情報や知識や叡智を引き寄せ、「ゼロポイントフィールド」を介して「互いの意識」が結びつくことがありうると考えられる。

ところで、「ある特殊な状況」においては、我々の「意識の世界」が「ゼロポイントフィールド」とつながると述べているが、その「特殊な状況」とは何なのか？が説明される。それを知るために著者は、現在心理学の最先端にある「トランスパーソナル心理学」(超個心理学)を踏まえて我々の意識の世界が「階層構造」になっていることを説明する。

- 1) 日常生活の雑音にあふれた「表面意識」の世界。自我(エゴ)の世界。
- 2) 祈りや瞑想によって生まれる「静寂意識」の世界。
- 3) 運気の引き寄せが起こる「無意識」の世界。
- 4) 無意識と無意識がつながる「超個的無意識」の世界。
- 5) 時間と空間を超えてつながる「超時空的無意識」の世界。

「静寂意識」によって「ゼロポイントフィールド」とつながりやすくなり、「無意識」で「ゼロポイントフィールド」とつながる。「超個的無意識」によって「ゼロポイントフィールド」を通して、人間の意識は互いにつながりうる。そして、「超時空的無意識」によって「ゼロポイントフィールド」にある「過去、現在、未来の出来事の情報と時間と空間を超えてつながる。ここで「直感」「シンクロシティィー」「以心伝心」に加えて、いわゆる「予感」「予知」「占いの中」といった「未来を知る」という体験が起こるといふ。

ちなみに、僕の知人のSさんは、「現在」と「過去」の出来事は見えるが「未来」は見えないという。それは彼女が「超時空的無意識」の段階に達していないということか。それともやはり「未来」情報は蓄積されていないということか。
並さんの先祖が平家の落人であったこと。

更に、著者は「死後の世界」の存在について踏み込んでいく。「臨死体験」「幽体離脱」「個人との再会」「霊媒」「死者との交信」「背後霊」「転生」「前世の記憶」など、。

「元々、我々の心の中の「自我」(エゴ)は、この現実世界での我々の生物としての「生存本能」に根源を持っている。「死」に対する恐怖、生存が脅かされることへの不安、そうした恐怖や不安から自我が生まれ、この生存本能に根差した「自我」が更に意識の中で広がっていき、「闘争心」や「競争心」「自他との分離」や「自他との比較」「承認欲求」や「自尊心」等の意識を生み出すのである。それが「敗北」や「挫折」「孤独」や「劣等感」「渴望感」や「自己否定」等を通して、我々の心に「苦しみ」を生み出しているのである。」(p228)

しかし、その「生存本能」に根差した「自我」は、現実世界では決してなくなる。肉体が死を迎えた後は、我々の意識は肉体を離れるため「肉体的苦痛」から解放されるとともに、「精神的苦悩」からも解放されていく。しかし、無残に殺されて、恨みを持って死んだり、強い後悔の念をもって死んだ人の意識は、死後「ゼロポイントフィールド」に移っても、「自我」が消えるまでの間、実しかい時間であるが「否定的な情報」を引き寄せてしまうため「苦しみに満ちた世界」を味わうことになる、という。

現実世界の事故が死んだ後も、「深層世界」である「ゼロポイントフィールド」では、自己は生き続け、成長し続け、最終的には自我、人類、地球意識を超えて「宇宙意識」に到達し、それ

と一体化されるとされる。

「死」に関して、著者は「私は肉体である」ととらえれば、現実世界で肉体が死滅したときが死であるが、「私とは自我意識である」ととらえれば、「ゼロポイントフィールド」にその自我意識が移ったのち、より高度な意識に成長、変容していくとき、自我意識はなくなり、「私とは壮大な深遠な宇宙の背後にある宇宙意識そのものである」と気づいたとき、「死は存在しない」のであるという。

本書を読み終えた感想はある種の論理の一貫性を感じるが、しかし、仮説の上にその論理が成立している点で危うさを強く感じる。「ゼロポイントフィールド仮説」の上に「プログラム原理」が乗っかり、その上に「量子脳理論」という仮説が展開され、その上に「トランスパーソナル心理学」の「階層構造」が成立していて、そこから死後の世界の意識の成長が主張されている。

ところで、Kさんが「見える」と言っていた「髪を乱し、鎌を振り上げたおばあさん」の描写は僕にはとても生々しく感じられ、「ゼロポイントフィールド」の「記憶」というよりは、「死後の世界」の実像のように感じられた。

また、Kさんの体から出て行った「3つの銀色の人体のようなもの」の生々しさも単なる「記憶」というよりは靈魂の「実像」のような印象を私は受けた。

果たして「死後の世界」は存在するのか、「魂」は「意識」は「ゼロポイントフィールド」の「記憶」として存在するのか、あるいは「死後の世界は実在する」のか、確信めいたものをつかめないでいる。

超心理学やトランスパーソナル心理学では、こうした問題に関して科学的アプローチがされていることをNETで初めて知った。科学的アプローチに期待したい。

なお、最近読んだ「人は死なない」(矢作直樹著basilico)はとても興味深かった。

矢作直樹氏は、東大大学院医学系研究科・医学部救急医学分野教授、医学部付属病院救急部・集中治療部部長。

亡くなられた母との「交霊」が記録されている。Eさんという霊能力のある女性が霊媒となり、母と矢作氏との対話を矢作氏が記録されている。

「後日、Eさんから聞いた話では、交霊中は、体の8割方が霊によって占められ、自分ばかりうじて意識だけがあるような状態で、霊が勝手にしゃべるのを横で普通に聞いているといった感じだったといいます。」

「繰り返しますが、私と母の対話の内容は、EさんやFFさんが事前に全く知らなかった内容です。また、Eさんは生前の母にあったことがないのにもかかわらず、交霊

中のEさんの体を借りた母の立ち居振る舞いは私の知る母そのもので、おかしくて吹き出しそうになるほど、性格も口調も仕草もそのままでした。

いずれにせよ、Eさんを通した母との対話は時間にすると短いものでしたが、私にとって圧倒的な存在感を持った体験となりました。」(p 152)

最後に著者田坂氏が主張しているのは「人類全体の意識の変容」と「人々の価値観の転換」である。具体的には「科学的知性」と「宗教的叡智」との結合による「新しい文明」の創造である。

科学者には専門的観点から「ゼロポイントフィールド仮説」の検討と検証を呼び掛けている。宗教者には「ゼロポイントフィールド仮説」の観点から、それぞれの経典や聖典が語っている「真理」を読み解くなら、この「仮説」が述べる世界の姿との「不思議なほどの一致」を多く見出すだろうと提言している。

確かに、フロイトやユングが解明しようとした無意識や潜在意識に関して、仏教の「阿頼耶識」などは2000年以上前に解明しようとしていた。著者が例を挙げて言うように、「古代の宗教的叡智」は「現代の科学的知性」が発見する「世界の真実」をはるか以前に直感把握していたとの指摘は興味深い。